

座長／東芝病院スポーツ整形外科／増島 篤  
／聖マリアンナ医科大学スポーツ医学講座／武者春樹

1964年、東京オリンピック開催を契機として、国際スポーツ医学連盟(FIMS)は国際オリンピック委員会(IOC)、各国オリンピック委員会(NOC)、世界保健機構(WHO)の協力のもとに、オリンピック参加選手の健康と体力について生涯にわたる医学的調査をおこない、その記録をスイス・ローザンヌのオリンピック博物館に保存する事業(Olympic Medical Archives=OMA)に着手した。しかし、FIMSを中心とした世界での調査は、調査協力国の減少により8年後に中止となった中、わが国では日本体育協会および国立スポーツ科学センターの研究の一環として4年毎のオリンピック開催年に50年余継続して行われてきた。調査内容は、1) アンケートによる健康・生活調査、2) 体力測定、3) メディカルチェック(内科・整形外科・近年歯科追加)である。東京オリンピック準備から始まったわが国の高度成長、食生活の変貌、高齢化の波が当時平均年齢24歳であった日本を代表するエリート選手達の70歳代半ばまでの変遷と現在社会問題となっている一般市民の高齢化との相違点を明らかにすることにより、現在から今後へさらに進んで行く高齢化社会へ何らかの指針を得ることを目的に企画された。

最初に日本体育協会スポーツ科学研究部の森丘保典先生が、体力面から「青年期の高度なスポーツ活動がもたらす「持ち越し効果」とは?」として、東京オリンピック記念体力測定の結果から、体力測定結果のまとめを報告した。筋力、瞬発力、敏捷性、柔軟性、運動実施率は一般人に比べ高く、持ち越し効果が推定される。逆に平衡性は一般人より低く、スポーツ障害の影響が疑われた。国立スポーツ科学センターの中嶋耕平先生は、整形外科の立場から「整形外科領域から」と題してまとめを行った。腰椎や膝関節は年齢相応の関節症性変化を認めるものの疼痛の訴えは少ない傾向であり、高い運動習慣と筋力・骨密度を維持しており、トップアスリートとしての高強度運動の障害は乏しかった。同じく国立スポーツ科学センターの土肥美智子先生から「内科的視点から(婦人科、歯科を含む)」の報告がなされた。48年経過時点においても脂質異常症は男女ともに一般人と比較して少なく、男性では高尿酸血症が多い傾向、糖尿病は少ない傾向が伺われ、血圧も低い傾向が認められた。婦人科領域では、一般人と比較して大きな差を認めず正常月経周期が79.1%であったのに対し、現在の選手では月経周期異常が40.7%と高いことが問題点として指摘された。また、歯科衛生意識が高い傾向が認められた。指定発言として東京大学名誉教授の中嶋寛之先生から、横浜市スポーツ科学センターのデータを元に体力の持ち越し効果が示され、また聖マリアンナ医科大学名誉教授の村山正博先生は体力の持ち越し効果、今後の調査継続の重要性を述べられた。総合討論においては、精神的問題等も会場から提起され、トップアスリートの全人的な将来像に関する討論が行われた。

日本を代表した東京オリンピック1964の選手達は、高い健康意識、運動習慣の維持を通じ、高齢化した現在においても健康寿命が延伸されていることが示され、今後のわが国の高齢化対策において若年時の高強度運動の必要性が明らかとなった。